

評伝 水島廣雄

あとから来る旅人のために

はじめに

人生を旅に例えることがあります。そして、その旅は戦いの積み重ねだと言う人もいます。その戦いに勝ち、選ばれた人のみが新たな価値を発見し、次の時代を旅する人のために新しい道を創造してきたのだと。

しかし、その考え方に立つとしても、戦いの仕方、選ばれ方も見ておく必要があります。勝つために他者を陥れた者もいれば、自らの知恵と工夫、間断ない努力と精進により勝利をつかんだ人もいます。水島廣雄氏は後者の巨匠の一人でしょう。

水島氏は一九五三年（昭和二八年）、『浮動担保の研究』によって、我が国で最も若い法学博士の学位を取得されました。その論文は立法化され、経済界に新たな発展をもたらしました。

さらに、自論を実践するかのように、勤務していた日本興業銀行から百貨店・そごうに転じた水島氏は、別会社方式により地域一番店を次々に出店しました。多店舗化を進めてそごうを日本一の百貨店に育て上げ、「デパート王」と称されるに至った経緯はあまりに有名です。

一方では教育者として、中央大学、東洋大学、上智大学などで教鞭をとられました。学生の指導にあたる傍ら、理事として学校経営にも参画し、新たな学部や学科の設置など、戦後の大学教育の革新にも大きく貢献されました。

晩年は、バブル経済崩壊の中でそごうが破綻し、誠に残念な結果に終わりましたが、水島氏は生涯「情の人」と慕われる生き方を貫き、一〇二歳で波乱万丈の生涯を終えられました。

故人となられた今、水島氏から多くを学び、ご縁をいただいた私たちに課せられた使命は、水島廣雄という人物の学者、教育者、実業家としての足跡と偉大な功績を改めてまとめることではないかと考えます。その一つの成果として、ここに『評伝 水島廣雄 あとから来る旅人のために』を出版することができました。

歴史は人類の記録であり財産でもあります。歴史は記録され、後世に伝えられるとともに、常に検証され、生きていく者の道標とされてきました。私たちがまとめている「水島廣雄の記録」は、水島廣雄という人物の人生を歴史の一部として残そうという取り組みです。水島氏を知る方だけでなく、より多くの方々にとって、水島氏の人生と残した論文や書き物が、それぞれの道標を見出す一助となれば幸いです。

評伝水島廣雄
あとから来る旅人のために
目次

アルバム 1

はじめに 22

第一部 評伝 29

第一章 成生から 31

第二章 浮動担保の研究 56

第三章 そごう・水島社長 98

第四章 大躍進の日々 138

第五章 水島王国の完成 166

第六章 苦難と屈辱 202

第七章 100歳の日々 230

第二部 追想文

249

水島廣雄先生との思い出 塩川 正十郎 251

水島廣雄氏回顧 日野原 重明 253

恩師水島廣雄先生と私 小林 秀年 255

水島廣雄先生との思い出 田淵 順一 260

水島廣雄氏 追悼文 福井 次矢 263

水島先生を偲んで 海部 俊樹 266

水島廣雄先生の思い出 高村 正彦 267

非凡 木村 義雄 268

水島廣雄先生を想う 太刀川 恒夫 270

「かれぶり会」のドンと私の母 中江 利忠 273

慈父のようなお方だった 山口 崇 276

水島廣雄さんとの出会いに感謝して 久水 宏之 279

水島さんが残したもの 原田 俊克 283

心の素晴らしい人 アルツロー マルティン 289

「やもあらばあれ」の心を偲ぶ 狩野 伸彌 292

カレプリ会 小谷 昌 297

水島会長に思うこと	橋本喬	300
井戸を掘った人	鈴木修	303
追悼文 水島廣雄先生との思い出に寄せて	鈴木敏文	307
水島先生を師と仰ぐ	上岡君義	309
水島先生との出逢い	長田繁	311
水島先生の教え	吉田卓	314
弔 辞	久野修慈	317
水島先生の刑事弁護人として	木川統一郎	320
追想文 故水島廣雄先生	志垣明	321
水島先生の想い出	雨宮眞也	323
水島廣雄先生の思い出	大森清司	325
水島廣雄先生の回想と追想	河村博旨	330
水島廣雄さんへのご報告	足立直樹	334
夢とロマンのお話	木村清	336
楽生会のこと	東田博	339
ありし日のお姿を偲んで	加島正美	342
バルセロナプロジェクトで接した水島会長の決断力	山本光宏／小磯哲朗	343

水島廣雄社長との四十余年の思い出 飯ヶ谷晴美 350

水島会長の人柄に触れ、世間誤解を晴らすための一文 池田修一 353

「ゴールド」をイメージした多店舗化戦略 竹下八郎 357

お墓参り 齊藤しげる 360

水島廣雄兄の大事な記録 上原淳男 363

幼いころの夏の思い出 水島有一 365

「評伝 水島廣雄」の発刊について 瀧野秀雄 369

第三部 論文・著作 373

浮動擔保の研究 (I) (FLOATING CHARGE OR SECURITY) 375

企業の担保 383

友情 392

松本丞治先生の思い出 394

経営綱領 412

経営と心 441

人間ドック同窓会挨拶 471

人の間——無力な自分が知ったこと—— 474

資料	477
水島廣雄 年譜	479
水島廣雄 主な論文・著書等	485
評伝 水島廣雄 参考図書・資料等	492
おわりに	496

水島廣雄の「廣」は、戸籍上は「广」に「黄」の「廣」の文字となっています。しかし本人自署以外の公式文書は、すべて「廣」の文字が当てられていますので、本書においても、表紙・扉題字以外は「廣」を用いました。